

日本におけるフィリピン系移民二世の
文化的アイデンティティと心理学的課題
Cultural Identity of Second-Generation Filipino Immigrants in Japan and Psychological
Issues

津田友理香*・いとうたけひこ**・井上孝代***
Yurika Tsuda, Takehiko Ito, and Takayo Inoue
(*明治学院大学大学院、**和光大学、***明治学院大学)

【要約】フィリピン人移民の来日 1980 年代以降増加し、2005 年以降は日本人の配偶者やその子どもとして定住・永住するケースが大半を占めるようになった。そして、2009 年末現在、中国を筆頭に、韓国・朝鮮、ブラジルに次ぐ第四のエスニックグループである。このように、定住者として生活するフィリピン系移民の実態を表す報告や研究はいくつか見られたが、心理学的観点からの研究はほとんどなされていない。本論文はフィリピン系移民二世の文化的アイデンティティの特徴とその影響要因について述べたものである。

キーワード： 在日フィリピン人、移民二世、文化的アイデンティティ

はじめに

近年、フィリピン系移民は日本人の配偶者やその子どもとして定住・永住するケースが大半を占めるようになった。そして、2009 年末現在、中国を筆頭に、韓国・朝鮮、ブラジルに次ぐ第四のエスニックグループである。後述するように、定住者として生活するフィリピン系移民の実態を表す報告や研究はいくつか見られるが、心理学的な観点からの研究は見当たらない。本論文の前半では、これまでの日本におけるフィリピン系移民の論文についてレビューし、後半では移民二世の文化的アイデンティティに関するタイプとその影響要因についての考察を心理学的観点から述べる。したがって、ニューカマー移民の文化的アイデンティティ研究の一つとして本論文を位置づけ、さらには心理学的課題について検討する。

1. フィリピン系移民の概要

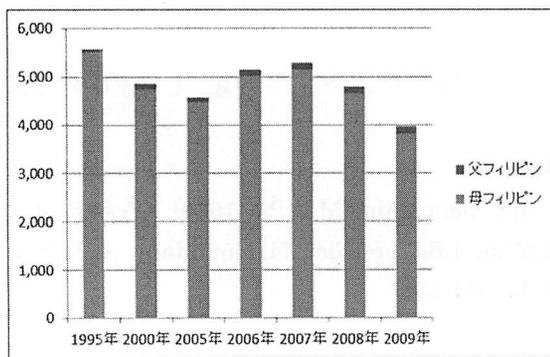


図 1 日本在住のフィリピンにルーツを持つ子どもの年次推移

(図 1、2 いずれとも厚生労働省、平成 21 年『人口動態統計年報』より作成) 1)

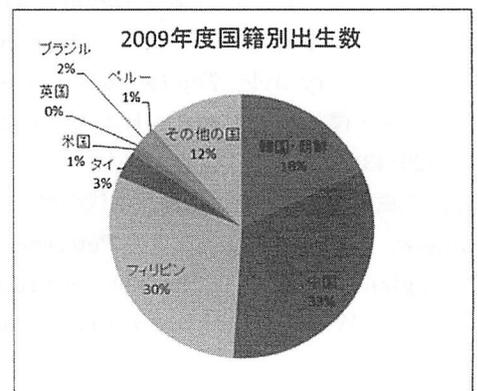


図 2 国籍別出生数の割合

日本におけるフィリピン系移民一世の多くは、1980 年代以降、「興行ビザ」や「日本人の配偶者等」で来日しており、その後 1995 年の入管法の改正により、興行あるいはエンター

ティナーは年々減少し、2005年以降は日本人の配偶者やその子どもとして定住・永住するケースが大半を占めるようになった。2009年末現在、在住フィリピン人は、21万1,716人であり、外国人登録者全体の9.7%、およそ10人に1人の割合である。国籍別では、中国を筆頭に、韓国・朝鮮、ブラジルに次ぐ第四のエスニックグループである。

また、都道府県別のデータによると、東京都3万人(7.6%)、愛知県2万6千人(12%)、神奈川県1万8千人(11%)と外国人登録者の全国籍の10%の比率を超える地域もある(総務省、2009)。しかし、年間2-3万前後で推移する非正規滞在者は含まれないことを考えると、実数は未知数である。

また、日比国際結婚のうち97%は、夫が日本人、妻がフィリピン人の組み合わせであり(図1)、全国籍中、1992年から1997年にかけてはトップを占め、それ以降は中国に次ぐ。また、両親のいずれかがフィリピン国籍の子の出生数は2009年を除いてほぼ毎年、全国籍のトップを占める(厚労省、2009)(図2)。

なお、フィリピン系移民をめぐる呼称は、歴史的文脈、政治的意味付けによってさまざまに使い分けられている(城・堤, 1999)(飯島・大野, 2009)。日本在住者の移民という意味合いでは、「フィリピン系」と呼ばれる。これに対して、戦前の渡比日本人が「フィリピン日系人」あるいは「残留日系フィリピン人」と呼ばれてきたため、そういった「旧」日系人との比較または分別として「新日系フィリピン人」と言われることがある。

さらには、日比国際結婚の子どものことを指す用語として、「JFC(ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン)」、「日比混血児」、「日比国際児」、「ジャピーノ」、「ハーフ」、「ダブル」などが用いられる。

しかし、フィリピン系移民二世に関しては、出生地や成育地、来日経緯、入国理由は様々であり、一概に述べることは難しい(表1、表2)。統計上は、1993年から2008年の間で、累計約8万人といわれるが、1992年以前の出生や日本への出生届のない子どもを含めると、推定10統計上は、1993年から2008年の間で、累計約8万人といわれるが、1992年以前の出生や日本への出生届のない子どもを含めると、推定10~30万人といわれている(国際移住機関, 2009)。

本研究では、フィリピン系移民という、より包括的な概念として用い、フィリピン系二世を「日本に在住するフィリピンにルーツを持つ人」と定義づけて論じる。

表1 出生地と生育地、入国経緯による分類(津田、2007; 2010b) 2)

タイプ	出生地	生育地	入国経緯
a	日本	日本	出生
b	フィリピン	日本	親の仕事/結婚/家族呼び寄せ等
c	日本	フィリピン	親の仕事/結婚/家族呼び寄せ等
d	フィリピン	フィリピン	親の仕事/結婚/家族呼び寄せ等

表2 両親の国籍による分類(津田、2007; 2010b) 2)

タイプ	父親の国籍	母親の国籍	子どもの国籍
a	日本	フィリピン	日本
b	フィリピン	日本	日本
c	フィリピン	フィリピン	フィリピン

2. 先行研究

本テーマに関連した教育関係の先行研究としては、宮原(2005)や西口(2007)が日本におけるフィリピン系児童生徒の学習環境と不就学問題について論じ、徳永(2008)はこれらの進路意識と将来展望について、それぞれの自己にとっての重要な他者と来日の経緯を軸に分析している。

日比国際結婚について、ストレスやメンタルヘルスの観点から桑山(1995; 1998)は、

農村花嫁として来日したフィリピン人女性を対象としている。佐竹・ダアノイ (2006; 2009) は、日比国際結婚の当事者として、フィリピン女性も含めた人権の観点から国際結婚の実態と問題点を明らかにした。

さらに、鈴木 (2009) は DV の被害を受け、母子シェルターで生活する在日フィリピン人シングルマザーと子どもたちの社会的・心理的困難さについての報告をしている。また、松尾 (2005) は国際離婚の現象を解説し、夫婦間の社会構造上のアンバランスさについて問題視している。

日比国際結婚における送り出し側のフィリピンの渡航前研修やカウンセリングプログラムについて、原島 (2009) が日本でのフォローアップの重要性について示唆している。

女性の移民と労働者問題については、DAWN (2005)、武田 (2005) がフィリピン女性エンターテイナーの実態を、支援団体の立場から明らかにしている。カラカサン (2010) は、DV や暴力にさらされた妻とその子どもたちのケアに関する報告を行っている。

医療の分野では、平野 (1998; 1999; 2000) がフィリピン人労働者を対象とした受診行動と関連する支援ネットワークの重要性と、抑うつ状態等の精神不健康と在比家族との関係や生活適応について分析している。高畑 (2008; 2009)、稲葉 (2008) は、日比間 EPA (経済連携協定) で来日したフィリピン人介護労働者に着目し、その現状と今後の課題を明らかにした。

さらには、東 (2010) はノンフィクション (マンガ、ドラマ、映画) などのマスメディア資料を分析し、年代ごとのフィリピン人女性のイメージの変遷を描いた。

また、国籍・市民権など法的な問題をめぐっては、城・堤 (1999) が日比国際児問題を多角的に論じている。飯島・大野 (2010) はフィリピン日系帰還移民の生活の問題を市民権とアイデンティティの観点から分析し、質問票による全国実態調査を行った。

フィリピンに在住するジャパニーズフィリピーノチルドレン (JFC) については、原 (2010) が当事者の問題について紹介している。内尾 (2009) は、多文化主義の観点から JFC の事例を検討している。

また、日本在住コミュニティについては、篠沢 (2009) が在日フィリピーノの生活実態を紹介し、寺田 (2009) はフィリピン人の教会生活を明らかにしている。バレスカス (1996) は在日フィリピン人労働者の状況を調査している。

社会福祉の分野では、コマフェイとメンセンディーク (2010) の京都の自助組織におけるフィールドスタディと事例研究を行った実態調査がある。看護の分野では、濱村・狩野他 (2004) の在日外国人の育児ストレスと対処法、育児における困難についての研究がある。

このように先行研究を見ると、2000 年代後半にはある程度の研究が蓄積されてきた。とはいえ、心理学的な観点からの研究は見当たらず、フィリピン系移民のアイデンティティ研究はこれまでほとんどなされていない。

3. フィリピン系移民二世の文化的アイデンティティ研究

青年の文化的アイデンティティと支援のあり方について、津田 (2007; 2010a ; 2010b) は論じているので、以下に紹介する。

3-1. 研究の背景と手法

文化的アイデンティティとは「自分がある文化に所属しているという感覚・意識」(岡本, 2002) である。また、アイデンティティの一側面として、「個人が生きている社会・文化システムと自分をどのような関係においてとらえるかを示す自己意識」だと捉えられる(鈴木, 2008 : pp.31-32)。心理学においては、在日コリアン、留学生、海外帰国生を対象とする研究が見られる(箕浦, 1991) (大西, 2001) (鈴木, 2008)。すなわち、このような場合に文化を考える時には、ミクロレベルに限らず、その個人が所属するメゾレベル、さらには社会等のマクロレベルの視点を考慮することが重要である。

本研究では、これらの先行研究を踏まえたうえで、ニューカマーであるフィリピン系青年

の生き方そのものに焦点を当てる狙いがあった。とりわけ、かれら特有の文化的アイデンティティを明らかにした。本研究では、「自分は〇〇である」という質問に選択式で答えてもらい、その理由をインタビューで詳しく聞いた。

対象は、母親もしくは両親がフィリピン出身で、14～24歳の青年計15名(男6:女9 平均年齢17.3歳)であった。インタビューは、東京都および神奈川県内の3教会において、縁故法で募った。毎週日曜日に英語あるいは日本語によるミサや様々な活動が行われ、フィリピン系移民が多く集う場所をフィールドとし、親と同伴する青年を対象とした。

加えて、日比青年を対象とする教会学校、日本語教室、文化イベントなどの活動にボランティアとして参与観察を中心としたフィールドワークを約7年間続けた。

調査方法としては、まずフェイスシートの記入をしてもらい、家族構成、文化的背景(国籍・言語)、帰国頻度などの設問への回答を求めた。次に、一人当たり約1時間の半構造化インタビューを行い、家族環境、来日経緯、ピアグループ、コミュニティ(教会や青年団体)への所属感、アイデンティティの自己認識等について質問した。

分析は、グラウンデッドセオリーアプローチ(戈木, 2006)と代表的な事例に関する個別のライフストーリーを用いた。調査手続としては、フィールドの代表者と本人に同意を得て、録音した。なお、すべてのインタビューは日本語で行われた。

3-2. 結果

親は、母親フィリピン人・父親日本人(13名)、両親ともにフィリピン人(2名)であった。国籍や養育環境に関しては、日本国籍(11名)、フィリピン国籍(4名)、日本生まれ・日本育ち(10名)、さらにはフィリピン生まれで幼少期に母親と来日(5名)であった。使用言語としては、家庭内での主言語は日本語(14名)であり、そのうち自己評価でフィリピン語を習得している(3名)のはごくわずかであった。帰国頻度も多くはなく、一時帰国・長期滞在する機会は少なく、児童期以降に一度も訪れたことがないものも(3名)いた。理論的分析では、文化的アイデンティティのタイプ化を行い、それぞれのタイプごとの個別事例を検討した。Berry(1997)の異文化接触理論によると、ホスト文化との関係重視、あるいは自文化維持の組み合わせにより、同化、分離、統合、周辺化の4タイプが提案されている。

表3 文化的アイデンティティと異文化接触プロセス(津田, 2007; 2010ab)

タイプ	文化的アイデンティティ	異文化接触プロセス	人数
A	「日本人」	同化、潜伏	5
B	「フィリピン人」	分離	1
C	「日本人でもフィリピン人でもある」	統合	6
D	「日本人でもフィリピン人でもない」	周辺化	1
E	「よくわからない」	探索	1
F	「見た目はフィリピン人、中身は日本人」	混乱	1

本研究では、上記に加え、潜伏、探索、混乱の3タイプが見られた(表3)。日本とフィリピンいずれか、もしくは両方の文化を自己認識している青年は15名中10名であった。特に、自分は「日本人(同化)」、あるいは「日本人でもフィリピン人でもある(統合)」がそれぞれ5名と6名で大半を占める。その他には、「日本人でもフィリピン人でない(周辺化)」「よくわからない(探索)」「見た目はフィリピン人、中身は日本人(混乱)」がそれぞれ1名ずつという結果となった。これは、二つ文化のはざままで悩み、「どちらにも属さない」と現在も葛藤状態にいるケースや、「見た目と中身が違う」というアンビバレントなケースである。さらに、個々の事例を詳細に検討したところ、日本社会に完全に同化するAタイプには、自らの多文化性や異質性が意識化されるきっかけがないために、その文化的アイデ

ンティティが潜伏しているというケースがみられた。また、両方の文化を認め、統合する C タイプには、母国の文化への接触機会があり、ピアグループと家庭内の文化や価値観の違いを意識するというようなケースも含まれる。

3-3. 考察

a) 文化的アイデンティティ

文化的アイデンティティの影響要因としては、3つ考えられる。まず、母親世代からのスティグマの継承ともいえる直接的・間接的な被差別体験である。日常生活場面で、見知らぬ人による偏見やステレオタイプに関する体験や家庭内の文化摩擦を見聞する体験等があげられる。次に、学校での同年代であるピアグループとの関係性において自己開示の困難さを示していることである。自らの文化背景を同級生に打ち明けることは少なく、発達段階で家庭内文化の「異質性」について気づくというようなことがあげられる。最後に、特に教会や青年団体に対するコミュニティへの所属感の低さや主体性の乏しさが示唆された。

このように、青年の文化的アイデンティティ統合を妨げる要因として、日本社会におけるフィリピンに対する否定的イメージや間接的な被差別体験がある。また、青年のエスニックコミュニティへの所属感の低さや活動への関心の乏しさについても指摘できる。

また、個々の事例から共通点を探ったところ、フィリピン系移民二世のなかには、自らのアイデンティティを「どこにも属していない」「ごちゃまぜ」などと表現しているものがあった。これは、二つの文化が共存しているというよりも、混沌とした中で揺れ動き、従来の国民国家や社会という大きな枠組みに属さない、文化的ディアスポラ（コーエン, 2001）を支持しているといえる。

b) 自助グループ

本研究の結果をふまえて、今後の支援のあり方については、以下のことがあげられる。まず、ネガティブイメージという現状に対応する支援案として、そのことを語る場や居場所づくりとしての同年代のピアサポートの構築である。

次に、コミュニティへの所属感の乏しさに対しては支援団体の役割機能の向上、特に支援者への教育訓練によって、青年の団体への自主的な参加を促進できるような組織づくりを行うことである。

c) コミュニティ支援

最後に、文化的アイデンティティの不安定な状態から脱却するために、母国文化の理解を促進させることで自己と自己が属しているコミュニティへの理解を深め、アイデンティティの確立を目指すという視点を提案する。すでに多文化社会やエスニックコミュニティの統合を進めている欧米では、コミュニティ心理学援助モデルを用いた支援（図 3）が主流である（ダルトン・イライアス・ウォンダースマン, 2007）。

そのモデルに基づいて多文化コミュニティの心理支援を考えると以下の観点が重要となる。1. 心理教育・啓発、2. 相談・治療、3. 研究・政策提言、4. 指導・援助とあり、特に個人への直接的な支援に加え、小集団やコミュニティへの間接的な支援の重要性が示唆される。そこで、フィリピン系移民に限らず、多文化社会を担う公的サービスは、政府や国際交流機関、民間サービスでは、NGO、教会団体、国際機関、企業等が考えられる。現状における主な支援とサービスは、表 4 に示される通りである。

今後は、在住移民の数が増加し、その多様性も増してくると考えられる。現行の支援は、ステークホルダーが各々にサービスの対象を定めている現状がある。それらの在住移民の支援を行うにあたっては、アクター同士の連携と支援ネットワークの構築が重要となってくるであろう。その際に重要となるのは、プログラム評価（チンマン、イム、ワンダースマン, 2010）の視点であろう。

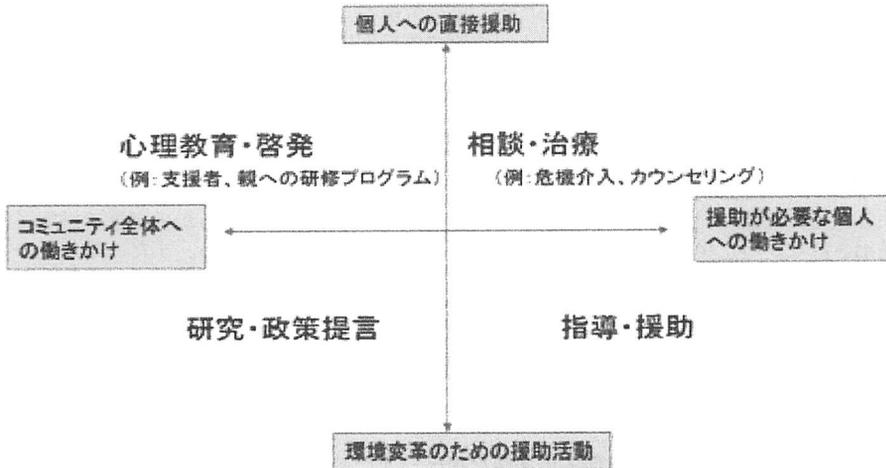


図3 多文化青年のためのコミュニティ心理学的援助モデル
(ダルトン・イライアス・ウオンダースマン、2007より著者作成)

表4 在住フィリピン人の支援一覧(津田、2010bより作成)

専門分野	支援例	対象者
社会福祉	生活保護、住居、シェルター	経済困窮者、シングルマザー、DV被害者
教育	語学・就学支援	子ども、在住フィリピン人
法律	ビザ、国籍所得	日系人、非正規滞在者
就労	就職斡旋、職業訓練	日系人、在住フィリピン人
医療保健	健康診断、母子保育	在住フィリピン人
心理社会	危機介入、カウンセリング	在住フィリピン人
信仰	ミサ、お祈り会	キリスト教信者
文化交流・文化継承	母語支援、外国人学校	在住フィリピン人
エスニックビジネス	情報、通信、物販、金融他	在住フィリピン人

4. 心理学的課題

心理学の分野においてインタビューやフィールドワークを用いた質的な研究方法やある特定のコミュニティに関わる場合には、研究者のバイアス、対象者の偏りについて認識する必要がある。特に、「フィリピン系移民」「マイノリティ」とラベリングし、類型化することで、さらなる差別やスティグマを助長する危険性に十分注意しつつ、研究を進めるべきである。さらには、グローバルな視点を取り入れてフィリピン系移民の多様性を理解する、と同時に地域差を見ていくことの必要性があると考えられる。

支援という切り口からは、支援団体同士のネットワークをより一層強め、子ども、家族、あるいはコミュニティ全体という視点を取り入れ、より当事者のニーズにあった支援の構築が必要だと考えられる。特に近年、メディアで取り上げられたフィリピン系青年の非行（窃盗事件など）や学校での不適応（いじめによる自殺など）が顕著になってきている。

その上で、心理学研究の課題としては、子どもの成長・発達に伴ったアイデンティティの変化、そのプロセスを追跡調査し、支援のあり方についてさらに検討する必要がある。同時に、それらの問題に対する予防・啓蒙活動が欠かせないといえる。

注1) フィリピン系移民に関わる人口統計については、厚生労働省(2009)の『人口動態統計年報』における「父母の国籍別にみた出生数の年次推移」と「夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」がある。総務省統計局(2006)では国勢調査における「国籍別人口」でのページを参照したい。また、出入国管理からは、法務省(2009)の「登録外国人統計」と「出入国管理白書」がある。さらに教育問題については、文部科学省(2008)による「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」が参考になる。

注2) 現在、10代以降に母親の連れ子として来日する1.5世代が増えている。また、フィリピンは生地主義を取っているため「無国籍児」はあり得ないが、非正規滞在者の子どもや何らかの事情で婚姻届け・出生届けが提出されなかった場合は、文字通り「無国籍状態」となる場合もある。また、婚外児の場合は、父親の認知があれば日本国籍を所得できる。加えて、フィリピンでは「二重国籍」を例外的に認める場合もある。

引用・参考文献

- 東賢太朗(2010)「表象・イメージ・現実—在・滞日フィリピン人女性表象の変遷から—」、『宮崎国立大学人文学部紀要』, 17(1), 1-7.
- バレスカス, M.(著)「在日フィリピン人労働者の多様な状況」、『日本のエスニック社会』, 駒井洋(編), 明石書店.
- Berry, J. W.(1997) Immigration, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology*, 46 (1), 5-34.
- チンマン, M., イム, P. & ワンダースマン, A. (著) (2010)『プログラムを成功に導くGTOの10ステップ—計画・実践・評価のための方法とツール—』, 風間書房.
- コーエン, R. (2001)『グローバル・ディアスポラ』, 明石書店.
- コマフェイ, N. & メンセンディーク, M.(2009)「在日フィリピン人コミュニティの自助組織活動」、『ソーシャルワーク研究』 35(3), 17-25.
- ドーン (DAWN) (編著) (2005)『フィリピン女性エンターテイナーの夢と現実—マニラ、東京に生きる』, 明石書店.
- ダルトン, J., イライアス, M., & ウォンダースマン, A. (著), 笹尾敏明(訳) (2007)『コミュニティ心理学—個人とコミュニティを結ぶ実践人間科学』, 金子書房.
- Erikson, E. H.(1980) *Identity and the life cycle*, New York: Norton
- 濱村美和子・狩野鈴子・三島みどり・永島美香(2004)「在日外国人の現状について(第1報)—在日フィリピン人の母親の育児ストレスとその対処法—」、『島根県立看護短期大学紀要』, 10, 45-52.
- 平野裕子(1998)「在日フィリピン人労働者の受診行動に関する研究」、『九州大学医療技術短期大学部紀要』, 25, 11-20.
- 平野裕子(1999)「在日フィリピン人出稼ぎ労働者の精神不健康に関する研究」、『九州大学医療技術短期大学部紀要』, 26, 11-26.
- 平野裕子(2000)「在日フィリピン人の日本社会における生活適応に関する研究:配偶者の国籍別比較から」、『九州大学医療技術短期大学部紀要』, 27, 83-88.
- 宮原暁(2005)「フィリピン人児童生徒の学習支援をめぐる諸問題—大阪・兵庫の事例から」、『大阪外国語大学論集』, 32, 195-207.
- 飯島真里子, 大野俊(2010)『日本在住フィリピン日系人の市民権・生活・アイデンティティ—質問票配布による全国実態調査報告書—』, 九州大学.
- 稲葉敏子(2008)『どこへ行く!? 介護難民—フィリピン人介護士にケアを受けるといふこと』, ペリかん社.
- 加賀美常美代(2003)「多文化社会における教師と外国人学生の葛藤事例の内容分析—コミュニティ心理学的援助に向けて—」、『コミュニティ心理学研究』, 7(1), 1-14.
- カラカサン〜移住女性のためのエンパワメントセンター(2010)『移住(外国人)母子家庭の子どもの実態と支援に関する調査—DVや暴力にさらされた子どものケア』, カラカサン〜移住女性のためのエンパワメントセンター.
- 河原俊昭・岡戸浩子(編著)(2009)『国際結婚:多言語化する家族とアイデンティティ』, 明石書店.
- 趙衛国(2010)『中国系ニューカマー高校生の異文化適応—文化的アイデンティティ形成との関連から』, 御茶ノ水書房.
- 原めぐみ(2010)『「帰国」する新日系フィリピン人—日本での生活と戸惑い—』, 『日本移民学会第20回年次大会』, 配布資料.
- 原島博(2009)「フィリピン人女性の国際結婚と日本への移住支援に関する研究—「送り出し側」の移住支援を事例として—」, 『ルーテル学院大学紀要:テオロギア・ディアコニア』, 42, 1-16.
- 法務省出入国管理局(2009)『登録外国人統計統計表』.
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001065021>
- 法務省出入国管理局(2009)『出入国管理白書』.

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyukan_nyukan90.html

イバーラ, C. M. (1999) 『折りたたみイミグレーションの共同体』, フリープレス

厚生労働省(2009) 『人口動態統計』, 「父母の国籍別にみた出生数の年次推移」, 「夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii02/>

桑山紀彦(1995) 『国際結婚とストレス』, 明石書店.

桑山紀彦 (著), 秋山剛 (編) (1998) 「“外国人花嫁”のメンタルヘルス」, 『こころの科学』, 77, 79-82.

国際移住機関(2009) 「新日系フィリピン人 (JFC) の現状」, 『移民政策学会冬季研究大会』, 配布資料.

松尾寿子(2005) 『国際離婚』, 集英社新書.

箕浦康子(1991) 『子供の異文化体験』, 思索社.

箕浦康子(1994) 「異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ」, 『教育学研究』, 61(3), 213-221.

文部科学省初等中等教育局国際教育課適応・日本語指導係(2008) 『日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査』.

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/1279262.htm

西口理紗 (著), 宮島喬, 太田晴雄 (編) (2007) 「揺らぐ母子関係のなかで—フィリピン人の子どもの生きる環境と就学問題」, 『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』, 東京大学出版会, 171-189.

岡本祐子(2002) 『アイデンティティ生涯発達の射程』, ミネルヴァ書房.

戈木クレイグヒル滋子(2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 理論を生みだすまで』, 新曜社.

斎藤ひろみ, 佐藤郡衛 (編) (2009) 『文化間移動をする子どもたちの学び 教育コミュニティの創造に向けて』, ひつじ書房.

佐竹真明&ダアノイ, M. A. (2006) 『フィリピン - 日本国際結婚: 移住と多文化共生』, めこん, 32-56.

佐竹真明&ダアノイ, M. A. (2009) 「フィリピン・日本結婚のありようどこじれ: 日本男性の変化と離婚を中心に」, 「トランスナショナルな母親たちの物語: 家族とジェンダーの概念における固定性と柔軟性」, 財団法人アジア・太平洋人権情報センター (編) 『女性の人権の視点から見る国際結婚 (アジア・太平洋人権レビュー2009)』, 現代人文社.

関口知子(2008) 「越境家族の子どもたち: 新移住者二世代の言語とアイデンティティ」, 『南山短期大学紀要』, 36, 75-101.

末弘美樹(2006) 『日本人留学生のアイデンティティ変容』, 大阪大学出版会.

鈴木一代(2008) 『海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成』, プレイン出版.

鈴木健 (著), 移民政策学会 (編) (2009) 「在日フィリピン人シングルマザーと子どもたちの『断絶』と『つながり』の連なりに寄り添う」, 『移民政策研究』, 1, 124-139.

高畑幸(2008) 「在日フィリピン人と加齢—名古屋の高齢者グループを手がかりとして—」, 『国際開発研究フォーラム』, 37, 59-75.

高畑幸(2010) 「興行から介護へ—在日フィリピン人、日系人、そして二世代への経済危機の影響」, 『移民政策学会 2010 年度年次大会』, 配布資料.

武田丈 (編著) (2005) 『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー—エンパワメントとその支援』, 関西学院大学出版会.

寺田勇文(2009) 『日本の教会のフィリピン人: フィリピン語のミサ』, 明石書店.

Tsuda, Y. (2007) "Caught Between Two Walls? A Study of Japanese-Filipino Youth in the Kanto Area." *B.A. thesis submitted to International Christian University, February, 2007.*

津田友理香(2010a) 「日比青年の文化的アイデンティティ—ニューカマー二世代のアイデンティティタイプと影響要因についての質的研究—」, 『日本応用心理学会第77回大会論文集』, 111.

津田友理香(2010b) 「フィリピン系移民二世の文化的アイデンティティと支援のあり方—当事者からの視点—」, 『移民政策学会 2010 年度冬季研究大会論文集』, 3-4.

城忠彰, 堤かなめ(編)(1999) 『はざまに生きる子どもたち—日比国際児問題の解決にむけて—』, 法律文化社.

徳永智子(2008) 「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望—『重要な他者』と『来日経緯』に着目して—」, 『異文化間教育学会』, 28, 87-99.

内尾太一(2009) 「現代日本における多文化主義の批判的考察—Japanese Filipino Children (JFC) を事例に」, 『東京大学超域文化科学専攻 (文化人類学分野) 「人間の安全保障」プログラム修士学位論文』.